

平成28年度

少年の主張 島根県大会報告書

第45回 島根県少年弁論大会



日 時

平成28年9月27日(金)
10:30~15:30

会 場

雲南市木次経済文化会館 チェリヴァホール

主催／青少年育成島根県民会議 島根県中学校長会
雲南市中学校長会 独立行政法人 国立青少年教育振興機構
共催／雲南市教育委員会
後援／島根県 島根県教育委員会 島根県警察本部
雲南市 雲南市青少年健全育成協議会
島根県PTA連合会 雲南市PTA連合会

はじめに

本年度の「少年の主張島根県大会」（中学生の弁論大会）は、去る9月27日、雲南市木次町のチェリヴァホールで開催されました。17名の県下各地区代表の皆さんが熱弁をふるいました。

この大会は、明日を担う中学生が、日頃考えていることや体験に基づく意見、社会の中で自分の果たす役割などを自分の言葉で表現し、同じ世代の若者に問いかけるとともに、少年の意識や行動について大人の理解と青少年育成について県民の関心を深めてもらうために開催しており、今年で45回目を迎えました。

今回の発表内容は、「家族の姿」「将来の夢」「自身の体験」からのテーマがほとんどで、例年の「国際問題」「社会問題」はありませんでした。そのことは、中学生自身が身の回りの出来事に心を注いだり、身近な人に生きる手本を求めたりしている姿であり、自己を見つめて生きようとしている現われであると感じました。

また、聴衆の雲南市内中学校の生徒の皆さんが実に立派な姿で聞いていて感心しました。ご出席の大人の方々も感銘を受けておいででした。「できればもっと大勢の大人に、若者の声・思いを聞いていただけるといいな！」と強く思いました。

この報告書（記録集）は、当日の主張者の発表を収録したものです。是非多くの方々にお読みいただき、中学生の思いや感性を受け止めていただき、今後の青少年育成のためにご活用いただければ幸いです。

終わりに、各学校や市郡での大会を含めて、参加して頂いた島根県内すべての中学生の皆さん、指導していただいた先生方にお礼を申し上げます。そして、当日審査員をお勤めくださいました方々、本大会の開催にあたりご協力いただきました島根県中学校長会・雲南市中学校長会の先生方、雲南市青少年健全育成協議会、並びに関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成28年12月

青少年育成島根県民会議
会 長 吉長 義親

目次

はじめに

大会風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

出場者のみなさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

平成28年度「少年の主張島根県大会」審査結果表・・・・・・・・ 7

平成28年度「少年の主張島根県大会」発表作品・・・・・・・・ 8

平成28年度「少年の主張島根県大会」開催要項・・・・・・・・25

審査員・来賓一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

平成28年度「少年の主張島根県大会」市郡大会概要一覧・・・・27

アトラクション紹介／平成27年度（昨年度）の受賞者・・・・28

平成28年度 少年の主張全国大会 出場者・審査結果・・・・29

全国大会「内閣総理大臣賞」受賞作品・・・・・・・・・・・・30

あとがき

大会風景



開会式（会場：雲南市木次経済文化会館 チェリヴァホール）



聴衆席風景（前方：来賓及び審査員席）



青少年育成島根県民会議会長あいさつ



島根県知事あいさつ（代読：出雲児童相談所長）



雲南市長あいさつ

出場者のみなさん

午前の部：9名



①西南中3年 篠原 由美子



②平田中3年 野津 僚祐



③三刀屋中3年 錦織 歩香



④仁多中3年 植田 鈴音



⑤江津中1年 土井 菜々子



⑥川本中3年 上坂 優菜



⑦津和野中3年 大羽 世倅



⑧湖南中3年 細田 沙雪



⑨安来一中3年 山崎 光翔

午後の部：8名



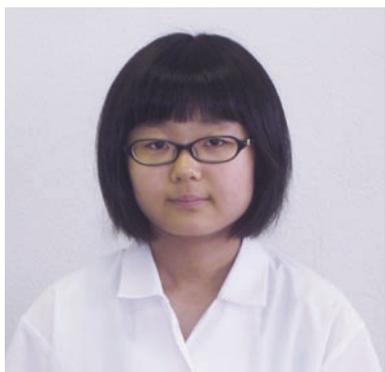
①浜田三中3年 田中 彩絵



②赤来中2年 堀越 実里



③北陵中3年 野一色 乃愛



④大田西中2年 山本 彩花



⑤五箇中3年 澤尾 美寧



⑥中西中3年 永尾 心風



⑦松江一中2年 林 英里



⑧大東中1年 永井 宏樹



記念撮影



アトラクション



審査講評



島根県中学校長会長あいさつ



青少年育成島根県民会議会長賞授与



島根県警察本部長賞授与



島根県教育委員会教育長賞授与



島根県知事賞授与

平成28年度「少年の主張島根県大会」審査結果表

| 賞名 | 演題 | 地区 | 学校名 | 学年 | ふり 氏名 |
|----------------|-------------|----|-------------|----|-----------------------|
| 島根県知事賞 | つなぐ傘 | 松江 | 松江市立第一中学校 | 2 | はやし 林 英里 |
| 島根県教育委員会教育長賞 | 世倅プラン | 鹿足 | 津和野町立津和野中学校 | 3 | おおば 大羽 世倅 |
| 島根県警察本部長賞 | 父の姿 | 出雲 | 出雲市立平田中学校 | 3 | のつ 野津 りょうすけ 僚祐 |
| 青少年育成島根県民会議会長賞 | 日常の中に | 雲南 | 雲南市立三刀屋中学校 | 3 | にしごおり 錦織 あゆか 歩香 |
| 審査員特別賞 | 壁の向こうに | 益田 | 益田市立西南中学校 | 3 | しのはら 篠原 ゆみこ 由美子 |
| // | ひとつのことばで | 江津 | 江津市立江津中学校 | 1 | どい 土井 ななこ 菜々子 |
| 優秀賞 | 夢のパワー | 仁多 | 奥出雲町立仁多中学校 | 3 | うえだ 植田 りん 鈴音 |
| // | 大切なものを守るために | 邑智 | 川本町立川本中学校 | 3 | うえさか 上坂 ゆうな 優菜 |
| // | 両手に伝わる重みから | 松江 | 松江市立湖南中学校 | 3 | ほそだ 細田 さゆき 沙雪 |
| // | 言葉の大切さ | 安来 | 安来市立第一中学校 | 3 | やまさき 山崎 ありと 光翔 |
| // | 命の授業 | 浜田 | 浜田市立第三中学校 | 3 | たなか 田中 さえ 彩絵 |
| // | 本が教えてくれたこと | 飯石 | 飯南町立赤来中学校 | 2 | ほりごし 堀越 みさと 実里 |
| // | 伝えたいこと | 出雲 | 出雲北陵中学校 | 3 | のいしきの 野一色 乃愛 |
| // | 十人十色 | 大田 | 大田市立大田西中学校 | 2 | やまもと 山本 あやか 彩花 |
| // | 私の夢 | 隠岐 | 隠岐の島町立五箇中学校 | 3 | さわお 澤尾 みね 美寧 |
| // | 母への理解 | 益田 | 益田市立中西中学校 | 3 | ながお 永尾 みかぜ 心風 |
| // | チャレンジャー | 雲南 | 雲南市立大東中学校 | 1 | ながい 永井 ひろき 宏樹 |



島根県知事賞

つなぐ傘

松江市立第一中学校
2年 林 英里

「あっ、雨だ。」

突然の雨で傘を持っていないとき、あなたはどうしますか。濡れて帰りますか。それとも友達の傘に入りますか。そんなとき、近くに無料貸し出し傘があったら助かりますよね。

私も貸し出し傘を借りたことがあります。突然の土砂降りで困っていた時、近くに無料の貸し出し傘があったので濡れずに帰ることができました。次の日、傘を返そうと思い、改めて松江駅へ行くと、借りた時より本数が少なくなっていました。それをきっかけになんとか気になって見ていると、晴れの日が続いても傘の本数がいっこうに戻らないことに気が付きました。

ちょうどそのころ、女子高生が始めた無料貸し出し傘の話題を新聞記事で読みました。お年寄りが雨でずぶ濡れになった姿を見かけたことがきっかけで、その女子高生は「愛の傘」という貸し出し傘を始めたそうです。ところが「お戻しく下さい。」と書いてあったにもかかわらず、200本あった傘が1ヶ月たったところで9割戻らず、ついに今年、その活動を終えるという話題でした。

ではそもそも、貸し出し傘の傘はどこから来ているのでしょうか。例えば、松江市の無料貸し出し傘「だんだんシェア傘」は、松江に観光に来られた方も、地元の人でも「雨の多い松江で雨を楽しんでもらおう」と、地域の人たちの1口3千円以上の寄付金で成り立っています。また、使わなくなった傘を貸し出し用として再利用する仕組みもあるそうです。私たち松江一中生徒会でも、持ち主が見つからない傘を「ころほっとアンブレラ」として貸し出し傘に再利用しています。「濡れないように」「風邪をひかないように」と気遣う人たちの思いで貸し出し傘はできているのです。

人の思いがこもった傘は借りる人の手に、

借りた人は、次借りる人が濡れないようにと思って返し、そしてまた次の人へとつながっていくのが本来の在り方です。

しかし、今はどうでしょう。借りた人の中に「返すのが面倒」「自分一人ぐらい返さなくても別に」という気持ちがあるせいでしょうか。一中の貸し出し傘も、約半数が返ってきていないそうです。

貸し出し傘は貸しているのだからあげているわけではありません。優しい心から始まったこの仕組みを、申請書や契約書を書かなければ貸し出しできないようにはしたくありません。

日本には、昔から「恩送り」という言葉があります。それは、もらった恩を受けた人に返すのではなく、第三者へと恩を送ることを言います。私は祖母からこの言葉を聞きました。テスト前なのに勉強にやる気が全くわかなかった時、

「英里ちゃん、勉強は自分のためだけにするんじゃないんだよ。英里ちゃんが人から教えてもらって勉強したことは、やがて世の中の人の役に立つんだよ。」と。してもらって嬉しかったこと、助かったことだけでなく、自分が身につけたことを社会に返すのも「恩送り」の一つなのだとその時はとさせられました。

「たかが傘、されど傘」。貸し出し傘の現状は、今の社会を映す鏡のようなものだと私は思います。「自分さえ良ければいい」という利己的な考えから、他の人のことを思いやるという気持ちが薄れてきていませんか？ 傘を返すという小さな行いが次の人への「恩送り」となり、そうした気持ちの連鎖が温かい社会を作ることにつながると思います。私も自分がもらったものを多くの人に返していけるようなそんな生き方をしたいと思っています。

あなたは、「恩送り」をしていますか？



島根県教育委員会教育長賞

世倅プラン

津和野町立津和野中学校
3年 大羽 世倅

「世倅、雪かきに行くから、手伝って。」

今年の1月、津和野町は大雪にみまわれました。膝あたりまで雪が積もり、玄関が開かないほどです。近所のお年寄りの方を心配した母に誘われて、僕は雪かきをしに行きました。雪は重く、腕や腰が痛くなり、お年寄り一人では、無理だろうなと思いました。僕たちに気がついた家の方が、慌てて出てきて、母と僕に何度も何度もお礼を言ってくれました。見ると、その方は、足にギブスをしています。これでは、雪かきができず、何日も困ることになっただろうなと思い、雪かきをしてよかったと思いました。ですが、若者がもっといればいいのにと考えた瞬間でもありました。僕の住んでいる地域には、子どもが僕を含めて2、3人しかいません。ですから、出会うのはお年寄りが多いのです。

そして、同じ頃、僕は近所に住む下地のおばちゃんの家で世間話をしていました。下地のおばちゃんは、普段から仲の良いお年寄りの方です。すると、急に下地のおばちゃんが僕に聞いてきました。

「将来、この地域から出るのかい？」

僕は、すぐに返事ができませんでした。

僕は将来、医師になりたいと思っています。医師を目指すようになったのは、島根県や津和野町が、少子高齢化や医師不足だという現状を知った頃からでした。ですから、地域医療をする医師になりたいと考えています。ただ、医師を目指すために進学するということは、津和野から出ることになります。お年寄りの方々にとっては、雪かきだけでなく、いろいろな場面で困ることがたくさんあるのではと心配になり、津和野から出てはいけなような気持ちになります。

「将来、この地域から出るのかい？」

「出てみたいと思う。」

言った後で、申し訳なく思いました。この地域から若者がいなくなって、もっと寂しく

なってしまう。しかし、下地のおばちゃんは笑顔で優しく言いました。

「応援しとるよ。」

この言葉は、迷っていた僕の背中を押してくれました。僕は決めました！医師になろう！必ず地域医療に携わろう！

下地のおばちゃん言葉に、勇気もらった僕は、地域のためになにかをしたいと思うようになりました。そして、ある計画を思いついたのです。名付けて、「世倅プラン」。「世倅」は僕の名前です。「世の中を倅せにできる人になってほしい」という願いを込めて両親が名付けてくれました。「世倅プラン」の内容は、次の二つです。

一つ目、「休みの日は、地域の中を歩いて、地域の人達がなにをしているのかを知る。」

二つ目、「地域のお年寄りの方に出会ったら5分以上話す。」

今年の2月から始めた「世倅プラン」は、今やもう半年が経ちました。今までよりお年寄りの方と出会う回数が増えたり、立ち話が盛り上がりたりと、良いことばかりです。地域の方の笑顔を見ると僕もうれしくなります。

今年の夏休み、僕はメディカルアカデミーに参加し、人を助けることの難しさを学びました。難しいことを成し遂げるには、もっと頑張らんといけん。今、僕は、医師になるという夢を叶えるために勉強を頑張っています。そして、世倅プランも継続しています。他にどんなことで、サポートできるのか、これからも考え続けていきます。地域のためになにができるのかを。



島根県警察本部長賞

父の姿

出雲市立平田中学校
3年 野津 僚祐

「僚祐、今日は10時から法事だぞ。」
父が私に言った。はあ、また法事か。もうこんな仕事嫌だ。数年前の自分なら、そう思っていただろう。今は違う。
「わかった。準備しとく。」
私は、笑顔でそう言った。私はこの仕事が好きになっていた。ある出来事が起こったおかげで。

私は小さい時から、父と一緒に法事に出向いていた。法事は2、3時間ぐらいだが、幼い私にとっては、たった1時間でも、永遠のように長く感じられた。足はしびれるし、友達と遊ぶ時間だって無くなる。それが嫌で嫌で、よく泣いていた。私は父の斜め後ろで、お経を唱えながら木魚やかねをたたく役目だ。そこからは父の後ろ姿がよく見える。全く動かず、まっすぐな姿は、まるで巖のようだ。今まで見てきて、その姿が曲がったことは一度もない。「忙しい」と言っているながらも、休まずに働く父の姿に、いつか私もこんなふうになりたいという気持ちが、少しずつ芽生えていった。

父はよく出張に出掛ける。その間、私が父の代理をしている。小学2年生の夏休みのことだった。その日も父は長い出張に出掛けていた。1本の電話で私の体に衝撃が走った。近所のお檀家さんが亡くなられたのだ。人が亡くなられたら一番最初に「枕行」をしなければならない。私はこれまでも父と一緒にやったことはあるが、あまり覚えていなかった。「嫌だ、嫌いだ」と喚いていた自分を、私はその時初めて呪った。一つ一つを一所懸命やる大切さを私はその時初めて知った。すぐさま父に電話で、どうすればいいか尋ねた。普段から厳しい父のことなので、「何回も一緒にやっているのに見てなかったのか」とてっきり叱られるだろうと思っていたが、父は怒ることなく一つ一つの手順を丁寧に、詳しく教えてくれた。私はすぐに荷物を準備

して、父に教わったことを頭の中で繰り返しながら、お檀家さんのところへ向かった。ものすごく緊張し、ちゃんとやり遂げられるだろうかという不安で胸がいっぱいだった。初めての一人での仕事が、始まった。(般若心経)緊張のあまり、足のしびれも感じず、時間が過ぎるのも忘れていた。ただひたすらに、あの巖のような父の姿を思い浮かべ、その姿に導かれるままに手を動かしお経を唱えていた。父が道を示してくれているようだった。何とか枕行を終えた。私は自分の姿が周りの人の目にどう映ったのか、すごく気になった。少なくとも、父の姿より随分と頼りなかっただろう。だからこそ、後日ある人から、「小僧さん、私の時もおつとめを頼むよ。」と言われた時、私は飛び跳ねるぐらいうれしかった。人の役に立てたことが、うれしかった。それからかもしれない。私はこの仕事を嫌だと思わなくなった。嫌う理由がなくなった。喜んでもらえる。人の役に立てる。これ以上に何を望もう。

それから月日が経ち、中学3年生。今では仕事を任され、一人ですること多くなった。勉強、部活、お寺。この忙しい日々には溜め息をつきたくなることもある。だが、私はあきらめない。いつか父の姿も越えてみせると強く思っている。私はこの仕事に誇りを持っている。人の役に立てるし、人を幸せにすることができるのだから。私を見守り、導いてくれる父に、父の姿に感謝。感謝。



青少年育成島根県民会議会長賞

日常の中に

雲南市立三刀屋中学校
3年 錦織 歩香

「君がため おしからざりし命さえ 長くもがなと思ひけるかな」

これは百人一首の中の一つです。この歌が、わたしにとって忘れられないものになりました。

私の祖母は1年前から認知症です。祖母は1年前、ふと意識がなくなり、頭を床に強く打ったそうです。祖母は松江に住んでおり、すぐにかけることはできませんでしたが、それを聞いて、私は頭が真っ白になり「意識は戻ったのだろうか。」「私の事を覚えているのだろうか。」という不安を抱きました。

私の祖母は、とても明るくて、おちゃめな人です。祖母の家に行くと、必ず祖母は私を強く抱きしめてくれます。そして、私のことについて、たくさん質問をして、私を喜ばせてくれるような人です。

そんな祖母が、倒れた後、どうなっているのか、私は不安な気持ちでいました。

そしていざ、祖母にあってみると、祖母は意識もあり、元気でした。しかし、今までと顔の感じが違い、焦点があっていないような目をしていて、なんだか痩せたような気がしました。

それでも私は祖母に、「今日、部活でこんなことがあって楽しかったんだよ。」「おばあちゃん、前あんなことしてたよね。」と、話しかけました。祖母は相槌をうって聞いてくれましたが、「何部なの?」「あら、そんなことしてないわよ。」などと、今まで覚えていたことやしていたことを忘れていました。それに祖母は、ずっと私の事を「ゆうか、ゆうか」と姉の名前で呼んでいたのです。結局、最後まで私の名前が呼ばれることはありませんでした。なんとなく予想はしていましたが、とても悲しかったです。いくら笑顔で話しても意味はなくて、こんなことを続けていてもどうせ私の名前を忘れちゃうんだなと思いました。

それから、祖母が一度私の家に泊まりにきました。体も少し不自由になったので、介護が無いとあるけない、そんな祖母でも楽しめるようにと、私は祖母と百人一首をしました。百首全部並べて、祖母が歌をよみ、私がとる、という形でした。大変でしたが、祖母は一首一首最後まで大切に詠んでくれました。

また、祖母は、「おばあさんは、この歌が好き。」と言いながら、その時代や意味を教えてくださいま

した。祖母は、会う度に、意味や好きな歌が変わっていきましたが、私は、祖母と百人一首をしているその時間がとても好きでした。

その間、祖母は私のことを何度か「あゆか」と呼びながら話してくれました。言った本人はあまり意識していないんだと思いました。私はとてもうれしかったです。あきらめかけていた自分がはずかしくなりました。私は、祖母や自分の限界を勝手に決めつけて、もう「名前を呼ばれなくてもいいだろう。」「しかたない。」と思っていたのです。それが、私のできる、最大限の祖母の受け止め方だと考えていたのです。

私は、次、祖母が来るまでにもっと覚えようと思い、家でも百人一首の歌をよみました。そこで、私は、ある一首の歌に目がとまりました。

「君がためおしからざりし命さえ長くもが思ひけるかな」

これは、愛しくて恋しい相手にもう一度会えるなら、この命がつきてもかまわない、という相手を強く思った歌です。ですが、私には、この歌は、なんだか祖母がうたった歌のようだと感じられました。そして、愛しくて恋しいその相手というのは、祖母にとって孫である私や、家族じゃないかと思うと、涙が止まりませんでした。祖母は、決して、何も考えず思いつきで話しているのではなく、一人の人間として強く思う相手や、大切に思う存在があるのではないか……そう気付いたからです。

そのときから私の「受け止める」という考えは、変わりました。

認知症の祖母が、たとえ今までの私達との思い出を忘れてしまっても、ありのままの祖母との日常の時間をかみしめることが、私なりの受け止め方なのではないかと思いました。百人一首を、祖母と一緒に楽しむこと自体が私にとって何にも変えられない時間です。

だから私は、祖母という人との時間を大事にして、日常の中にある一瞬一瞬を大切にしよう決めました。そして、日常の中に、私にとって、家族だけではなく、周りの人と接する上でも何にも変えられない時間があるのではないかと気付いたのです。

そのことに気づけたわたしは、これまでよりも、「日常」を輝いたものとして見る事ができそうです。



審査員特別賞

壁の向こうに

益田市立西南中学校
3年 篠原由美子

「うちの餃子おいしいんよ！皮は手作り。中身は卵とニラだけ。肉が入ってないのにすごくおいしいんよ！」

私はよくわが家の餃子を自慢します。でも、話はいつもここで終わります。母がどこで誰に習ったのか聞いたことがないし、それ以上は話したくなかったからです。

私の母は中国人です。そのことを知られるのがなんとなく嫌でした。インターネットで調べた中国の悪い評判が気になって、私も非難されるのでは、と不安でした。

母が日本語を話している時はまだ「母さんだ。」と思えるけれど、電話などで中国語を話している時は、「これは母さんじゃない。」という気がするのです。中国語がよくわからないから、ついいらいらするし、「日本語を教えて。」と言われるとめんどくさくて、「母さんが日本人だったらどんなによかったらう。」と何度も思いました。

ある日、母にさそわれて毎週行われている日本語講座に行きました。「私は／料理をします。」「私は／買い物をします。」母が笑顔で大きな声で勉強していました。一生懸命です。

私は驚きました。「母さん、なんでそんなに日本語を勉強するの？なんでいつも日本のことを知ろうとするの？」

すると母は、「それはね、家族や地域の人と会話したいから。娘ともたくさん話がしたい。私はね、日本に来る前、日本のことをすごく悪い国だと思っていたの。戦争でたくさんの中国人を殺したから。でも、日本に来て優しい人達にたくさん出会って、日本のことをもっと知りたいと思えるようになったのよ。」と言いました。

何も知らなかった私。ふるさとを遠く離れて、大好きな餃子を作りながら、日本に溶け

込むために言葉の壁を乗り越えようとしてきた母。どんなに不安だったでしょう。どんなに大変だったでしょう。私は母の楽しさにも苦しさにも心に向けていなかったことに気がつきました。

私は父の気持ちを聞いてみました。「父さん、この前、PTAの会の自己紹介で、『皆さんご存じかもしれませんが、私の妻は中国人です。』と言ったのはなんで？」「異国で一生懸命言葉にも仕事にも、果敢に挑戦している姿に胸をうたれたからそれを伝えたいと思った。それだけ。」

父は母のことをちゃんと見ていたのです。私は母の何を見てきたのでしょうか。日頃、差別はいけないと言っているのに、「母は中国人」そのことだけで無意識に心の壁を作ってしまったのです。生まれ育った場所や話す言葉は人によって違う。ただそれだけのことなのになぜこだわっていたのだろうと今は思います。

私達は小さい頃から教えられてきたことやインターネットなどによって偏った情報を受け取ってしまうこともあります。それが生きていく中で壁となることがあります。物事を正しく判断できずに、偏った見方を正しいと思ったりするともっと壁は高くなります。

私は長い間、自分で作った壁に苦しんできました。でも壁の向こうを見た時、二つの国を大切に思う母の気持ちが見えてきました。そして、とても楽になりました。母の国の話がたくさんできるようになりました。壁をなくしていくのは自分自身なのだ気がつきました。

壁を作らないこと。できた壁を壊すこと。そうすれば違う世界が見えてくることを、母が教えてくれました。



審査員特別賞

ひとつのことばで

江津市立江津中学校
1年 土井菜々子

ひとつのことばでけんかして
ひとつのことばでなかなおり
ひとつのことばで頭が下がり
ひとつのことばで心が痛む
これは、私の好きな詩の一節です。

私には、この詩のように「一つの言葉で」けんかをしたり、心痛む思いをしたり、優しい言葉に救われたりした思い出があります。

小学6年生のとき、私は仲のいい友だちから「バカ。」「へたくそ。」と言われて傷ついた嫌な思い出があります。その友だちは、軽い気持ちで言ったのですが、私はしばらく口をききませんでした。そんな時、自分が軽はずみで言ってしまったことで、今でもずっと後悔している出来事を思い出しました。

それは、私が小学2年生のときのことで。まだ幼かった私は、母のお腹に弟がいるということで、お姉さんになる喜びと弟にお母さんを取られるんじゃないかという不安をもっていたのだと思います。

ある日、母のひざの上で歯みがきをしてもらっていた時、私は母のお腹を頭で突いてしまいました。父に「危ないだろう。」と叱られ、弟ばかり大事にされると、私はイライラして、「赤ちゃんなんて死んじゃえばいい。」と行ってしまいました。その言葉を聞いた父は、「そんなことを言っているのか。」と、幼い私を本気で怒鳴りつけたのです。「弟が死ねばいいなんて、思っていなかったのに。」言い訳もできず、私は泣くしかありませんでした。

それから一月くらいたって、弟は母のお腹の中で、亡くなりました。「オギャー。」と泣くこともなく、父や母や姉である私の顔を見ることもなく、弟は亡くなったのです。

それは、弟の運命だったのかもしれませんが。しかし、私は「自分のせいだ。私がひどいことを言ったからだ。」そう自分を責めました。悲しくて苦しくて泣いていた私に、母は「な

なちゃんのせいじゃないよ。」と優しく言うてくれました。

きっと母の方が、私よりずっと辛かったはずです。「自分が無理をしすぎたせいかもしれない。もっと大事にしておけばよかった。」そんなふうに後悔していたと、後になって母から聞きました。我が子を失った悲しみの中でも、娘である私の苦しみを知って、優しい言葉をかけてくれた母に私は救われました。

今でも後悔は残っていますが、この出来事をおして、私は「言葉には力がある」ことを知りました。言葉は、心を傷つける凶器にもなるし、心をいやす薬にもなるのです。

今も、学校の中で、「死ね。」「消えろ。」など、ひどい言葉を聞くことがあります。私は、その言葉を聞くと、本当に悲しくなります。

言葉の重みを知った私にできること。それは、「人が傷つくひどい言葉をなくしていこう。」そうみんなに伝えること。そして、私自身が、母のようにどんなときでも優しい言葉をかけられる強くて優しい人になることです。

ひとつのことばはそれぞれに

ひとつの心をもっている

きれいなことばはきれいな心

優しいことばは優しい心

この詩の一節が、私に「言葉の大切さ」を教えてください。

毎日を振り返ると、楽しいこともあります。辛いことや思うようにならずイライラすることもたくさんあります。そんな時、優しい言葉は、人を励まし、人を元気にしてくれます。温かい言葉をかけられた人が、また誰かに温かい言葉をかける、そんな優しさの輪が広がればいいと思います。

私はこれから、天国の弟に恥じないように、「一つの言葉」を大切に、私から優しさの輪を広げていきたいと思っています。



優 秀 賞

夢のパワー

奥出雲町立仁多中学校
3年 植田 鈴音

皆さんは、自分の夢を持っていますか。夢について考えたこと、語り合ったことはありますか。以前私は、夢なんか必要ないと思っていました。でも、ある時、そんな私の考えが大きく変わることになります。

今までの私は、夢なんか必要ないと思っただけで決めつけていました。「看護師になりたい」「家の仕事を継ぎたい」「ホッケー選手になりたい」周りにはいろんな声があふれているのに、私の心には何も響かなくて、夢の必要性が分からないまま私は中学2年生になりました。

中学2年生になり、数ヶ月経つと総合の学習の時間ではだんだんと進路についての話が多くなってきました。

「自分の夢を持っている人は手を挙げてください。」

先生の何気ないそんな問いかけに私は、どうせ夢なんか持っている人なんてそんなにいないから…と思い、辺りを見回してみると、約半分くらいの人が見上げていて、少しだけ置いて行かれたような気持ちになりました。正直、その後言われたことはよく覚えていません。でも、たった一言だけ、心に引っかかった言葉があります。

「ぜひ、将来の夢を持ってみてください。」

そんなに夢って必要なのかな。持っていて何になるのだろう。私はその時、その言葉の意味が分かりませんでした。「ねえねえ、夢ってそんなに必要だと思う？」

その日の夜、ある友達に何気なくメールで聞いてみました。

「俺は必要だと思う。」

ただ打ってあるだけのちょっとした言葉なのに、何か力強さを感じました。

「なんで必要だと思うの？」

「逆になんで必要ではないと思うんだ。」

私は答えに困りました。なぜ必要ではないと思っているのだろう。自問自答を繰り返していた私に、彼はこう言ったのです。

「夢を持っていれば、その夢に向かって努力

をする。失敗を何回も何回も繰り返して強くなる。チャレンジする心だっけって育てる。それが自信へとつながって前向きになれる。夢はその人にとっての一つの希望であり、自分の進んでいく道になるんだ。」

一見、きれい事ばかり並べているような言葉だけれど、私にとってとても救いの言葉でした。「夢ってそんな力を持っているんだ。」私はその日から、自分の夢について考えるようになってきました。

ある日のことです。いつものように家に帰り、テレビをつけた私は、たまたま映った番組にくぎ付けになりました。そこには、初めて日本に来て道が分からず困っていた外国の人が、空港のスタッフの方に助けられ、みな笑顔で出発して行かれる様子が映っていました。その光景を見た私の中で何かはじけました。人の役に立てる仕事に就きたい、音楽が好きで英語を生かして、海外の人たちとふれあえるような職業に就きたいと思っていた私にはぴったりだと思いました。

私の夢。今なら自信を持って言えます。それは、空港のグランドアテンダントになり、世界中の人の助けになること。この夢に向かって、私は自然と努力するようになりました。家での勉強にも力が入ります。ALTのアマンダ先生にも積極的に話しかけるようになりました。自分の夢に向かって前向きに努力できるようになり、その努力が自信となり、その自信は私の武器となりました。そしていつからか私は、「夢が必要ではない」と思っていた後ろ向きの私ではなく、夢の力を知り前向きな私になっていました。

大切な、大きな夢を持った今、少しずつではあるけれど、夢に近づけるようがんばっています。この夢への努力こそが、自分の力となり、私が前進するための原動力となります。これこそが夢のパワーだと思います。私は私の未来を自らの手で、力強く切り拓いて行きます。



優 秀 賞

大切なものを守るために

川本町立川本中学校
3年 上坂 優菜

夜、空を見上げると、満天の星空が見えること。朝起きると、鳥の鳴き声が聞こえること。いつの間にか草刈がされている通学路。挨拶をすると、優しい笑顔で返してくれる町の人。世界で、たった一つの私のふるさと、川本町。では、そんな川本町の良さは、いつまでも守られるものなのでしょうか。

今年の春、中学3年生になった私は、「進路」という新たな壁にぶち当たっていました。就きたい職業は分かっているけれど、今まで具体的に考えたことのなかった自分の進路について、迷うことばかりでした。

そんなある日、私の通っている塾で三者面談がありました。その最後に、進路について聞かれた私は、ずっと島根に残り、将来は観光雑誌の記者になりたいと、今思っている自分の未来像を話しました。すると、塾の先生は、私にこう言いました。

「すごくいい夢だね。きっとあなたは、ふるさとが大好きなんでしょう。でも、離れてから気づく、ふるさとの良さも、あると思うんだよね。」

離れてから気づくふるさとの良さ？その時の私は、その言葉の意味を、あまり分かっていませんでした。

3年生になってからの日々はあっという間に過ぎ、進路についての学習も少しずつ多くなっていきました。そんな時、学校の授業で職場体験をすることになりました。私が体験先に選んだのは、「かわもと暮らし情報センター」というところです。そこでは、県外の方に川本町への移住を進めるために町の情報発信や移住全般のサポートをしています。スタッフの中にも県外からこられた人がおられ、いつもと違った見方で、川本町を見つめることができました。

体験2日目、私は実際に川本町への移住を考えている東京出身の方と、町内を回ることができました。すると、私がずっとこの町のデメリットだと思っていたことがメリットでもあるということがわかりました。例えば川本町は町の規模がとても小さいけれど、その

中に小中高の3つの学校、大きな病院、薬局、スーパー、警察署もあります。一見窮屈そうですが、考えてみればすべてが身近なのです。また、川本町には娯楽施設がほとんどありません。それも見方を変えると子育てや教育にはとても向いていると言えます。その他にも、街の出来事や商店の情報などを伝える有線放送、年に1回ある自治会の野球大会など、地域で一体になる活動も、都会ではなかなか味わえないとわかりました。たった2日間の職場体験でしたが、ずっと川本町にいた私には気づかなかったこの町の良さに触れることができました。移住を考えている人にとってはとても魅力的に感じられるんだ。きっとまだ私が知らないこの街の良さがある。それこそが、「離れてから気づくふるさとの良さ」につながっているに違いありません。

職場体験の最後に、スタッフの方が私にこう話してくださいました。

「私たちが子供たちに一番望んでいることは、川本町に帰ってくることです。でもみんながそうできるわけじゃないよね。だから、都会に行ってもふるさとのことを誇りに思っていて欲しい。そう思ってもらえるよう、私たち大人は川本をもっといい町にするために働いていきたいと思っています。」

この言葉を聞いて、改めて私は「この町に生まれてよかった」と、強く思いました。

「この人たちが、私のふるさとを支えている。私も自分の進路を、ふるさとを守るために役立てたい。」

私は、ここにいる誰か一人の進路がふるさとを思いやることで、10年後、20年後のふるさとを守ることに繋がると 생각합니다。そして、私たち子供は、その進路を考える権利があります。自分の進路を何に役立てるか、自分たち次第なのです。みなさん、自分の進路を考えたとき、ふるさとについても考えてみませんか？もし大人になったら都会に行きたいと考えている人がいたら、いつかふるさとのことを考えてみてください。みなさんの、たった一つのふるさとを、守るために。



優 秀 賞

両手に伝わる重みから

松江市立湖南中学校
3年 細田 沙雪

「いらっしゃいませ。やきとりはいかがですか。」いつもは静かな乃木公民館に、地域の方々や中学生の元気な姿が溢れ、たくさんの屋台が並ぶ乃木ふるさとまつり。皆さんは地域の行事やボランティア活動に参加したことはありますか。私は中学1年生の時、初めて乃木ふるさとまつりのボランティアに参加しました。楽しそうだからという軽い理由でしたが、後々私にとって、とても大きなものを得た1日となりました。

私が担当したやきとり屋の仕事は難しいものではなかったのですが、その日は気温が高く、熱いやきとりの売れ行きは順調ではありません。まつりが終わる30分前になっても全てを売り切ることができずにいました。そこで、店の前でお客の呼び込みをしようということになりました。最初は恥ずかしくて声が出ません。そんな私の横で、大きな声を出して頑張っている友達や先輩の姿を見て、恥ずかしがってはいけません。お店の役に立つことができない。そう思い、大きな声で呼び込みを行いました。「1パック200円のやきとりはいかがですか。」いつの間にか恥ずかしさは消え、大粒の汗を流しながら、ただ大声で呼び込みをする自分がいました。その甲斐あってか、無事に全てのやきとりを売り切り、最後の一つが売れた時には、みんなで手をたたいて喜びました。大変だった分、得た達成感はとても大きなものでした。店の片付けが終わった時、責任者の方が「これ、持たせてあげる。」と言われ、大きな袋を手渡されました。それは完売したやきとりの売上金でした。掌に乗せたときの両手から伝わるずっしりとした重み。それは、働くということの重みでもありました。働くことで結果を得ることは、どれだけ大変なことなのか身をもって知りました。私たちの知らないところで、祭りまでの準備を進めてくださった地域の方々やお店に来てくださったお客さん、ボラン

ティアで参加した私たち中学生。たくさんの方が関わることで祭りは成功に終わり、その祭りに汗だくになりながら携わることで得られた重みでした。

「働く」ということは、決して楽なことではありません。毎日家族のために働く両親を見ていてもそう感じます。自分の時間も減り、体調が悪いときでも無理をして仕事に向かう両親。どうしてそこまで頑張ることが出来るのか。私はこのボランティアで気づきました。私たちは働く人たちに支えられて生きているのではないかと。つまり、働くということは、自分が誰かの役に立つということです。

私は昨年、そしてこの夏も地域のボランティア活動に参加しました。混雑した中をわざわざ買いに来てくださり、「ありがとう」と私にかけていただいた言葉に、心が温かく、胸が熱くなることもありました。そんな経験の中で分かったことがあります。自分が将来社会人になった時に、働くことで人の役に立つことが、自分のやりがいにつながるんだということ。そして、たくさんの人との関わりの中で自分が誰かに必要とされていることが働くことへのやりがいにつながるんだということ。

私は将来、英語を使う仕事に就きたいと思っています。中学2年生の時からずっと英語が好きで、関心があるからです。国境を越えれば、言葉を通じてたくさんの人と関わる事が出来ます。きっと自分を必要としてくれる人もいるはずですよ。

私たち3年生は、この秋、職場体験に出かけます。どんな体験が待っているのか、今から楽しみです。誰かの役に立てること。人から必要とされるようになるために、たくさんの方のことを学んできたいと思っています。掌に感じた働くことの重みをしっかり感じて。



優 秀 賞

言葉の大切さ

安来市立第一中学校
3年 山崎 光翔

「死ねや。」「ウザ。消えろ。」

僕の毎日の生活の中で、時々聞く言葉です。ゲームをしている時、生活の中でうまくいかないことがあった時……「死ね」や「消えろ」という言葉が、いら立つ気持ちを、自分に、そして誰かに向けてぶつけられます。でも僕は、その言葉に抵抗を感じています。それは「死」というものを実感した、3年前の出来事が僕を変えたのです。

僕が小学6年生の頃のことです。ある日、4時間目も終わり、給食の準備をしていると、先生から急に呼び出されました。「かばんの準備をしろ。」と言われ、急いでかばんの準備を済ませました。そして帰ろうとすると、先生から「がんばれよ。」と一言、言われました。

嫌な予感がしました。昇降口に向かうと、父が、泣いて真っ赤な顔をして立っています。おそろおそろ父に声をかけると、泣きながら言われました。「妹が死んだ」と。

僕は何のことかわからず啞然としていると、弟も来て、すぐに車で家に戻りました。すると、母と祖母が泣きながら、横たわる妹を見つめています。僕はその場にいることができず、自分の部屋に戻り、ずっとうずくまっていた。その時は、何も考えることができず、ただただボーッとしていました。そのまま夜が訪れ、次の日になってしまいました。

僕の心の中には、妹の姿がありました。病気と戦いながら、懸命に生きようとしていた妹に、自分は何をできたのだろう。妹に対して申し訳ないような気持ちでいっぱいでした。

落ち着かない気持ちのまま、葬式を終えました。その後、来てくださった方々へお礼を言う場面が来ました。ちょうど雨も降ってきて、ますます悲しい気持ちがこみ上げました。これからの妹のいない生活の中で、父や母にどうふるまえばいいのかな……などと考えていた僕に、来てくださった方々が、「がんば

れよ。」「妹の分まで一生懸命がんばってね。」と心から励ましてくださったのです。その時、僕は初めて声をあげて号泣しました。

僕はあの時の気持ちを、今でも忘れることができません。僕は初めて「死」ということを実感しました。一生懸命生きようとした妹。自分が死ぬことなど、きっと考えもしていなかった妹。もう顔を見ることも、声を聞くこともないのです。妹のことを思うと、「死ね」とか「消えろ」という言葉がどれだけひどいものだったのか、そして、人を傷つけるような言葉を、なんでこれまであんなにも平気で言っていたのかと思うようになりました。

さらに、妹が亡くなった後の僕は、妹の死の責任が自分にあるのではないかと思い込み、とてもつらくなることがありました。そんなときには、家族や親せき、そして友人と妹の話をしました。もやもやした思いを言葉にすることで、自分の気持ちが整理できるのです。また、話を聞いてくれた人たちから「がんばれよ。」「自分がちゃんとしないと、妹が悲しむぞ。」と励まし声をかけられて、前向きにがんばろうと思えました。僕は、僕の周りにいる人たちに温かく見守られているということ、言葉によって実感したのです。

あれから数年が過ぎ、中学3年となりました。僕は最近この時の気持ちが薄れてしまったのか、「人を傷つける言葉」をたまに言っているような気がしています。また周りからもそんな言葉を聞きます。僕はその度に心のどこかが苦しくなり、また、あのときの気持ちを思い返すのです。

人は、お互いに支えられて生きているものです。お互いの存在を認め合い、励まし合える言葉をかけ合って誰もが暮らしていけば、人とのつながりやきずなが深まっていくのではないかと思います。

僕は人をつなぐ言葉を大切にしたいです。そして妹の分まで精いっぱい生きていきます。



優 秀 賞

命の授業

浜田市立第三中学校
3年 田中 彩絵

「死ね。」この言葉を何度学校生活の中で耳にしたことでしょうか。この言葉は私簡単に聞き流せる言葉になっていました。しかし、一つの経験を通してこの言葉がどんなに重く、軽々しく口にしてはならない言葉かということに気がつきました。

私は生徒会活動で弥栄町で狩人をしておられる今田孝志さんのところへ行き、「命の授業」というものを受けました。今田さんに会ってすぐに見せられたのは、イノシシの死体です。内臓がすべて出され、お腹が空っぽになっているイノシシの体がそこにつるされていました。バケツの中のをぞくと、もう動かなくなってしまったイノシシの心臓がありました。血まみれになったイノシシの動かない心臓を見て、私の中で説明できない感情がこみ上げてきて、その光景から目をそらしてしまいました。お店に並んでいる、パックにきれいに詰められたお肉との差に衝撃を受けました。気持ち悪い、そう思うのはなくなった命に失礼だ、いつも食べているお肉もこんな風になっているのに、本当は見なきゃいけないのに…。見ることができなくて、悔しくて、申し訳なくて、たくさん涙を流しました。

今まで何度、先生や大人の人に「命を大事にしなきゃダメだ」と言われてきたでしょうか。正直、何の説得力もありませんでした。私にとって一つの常識として胸の片隅においておくだけの言葉だったからです。でも、その時イノシシの死体を見て、本当の「命」を見た気がしました。どんな大人の言葉より説得力がありました。

今田さんはこんなことをおっしゃっていました。「神様はこの世に必要な命しか生んでくれないんだ。だから今ある命を全力で生きる。」と。今田さんはご自分で狩りをして、自分の手で動物を解体されます。その今田さんの言葉だからこそ私は納得することができたと思います。私はこれまで前向きになれな

くなったり精神的に追い詰められた時など「私が死んでも誰も困らないんじゃないか」と思うことがありました。ですが、自分の中で重く感じていた「死にたい」という言葉は、目の前で目にした死と比べるととても軽い言葉だったのだと気づきました。そして今田さんの言葉を聞いて、自分もこの世に必要な存在なんだ、そして必要とされて生まれてきた命をいただいているんだ、それならしっかり感謝して生きなくては、と思うようになりました。

今、当たり前前に話して、歩いて、息をして生活しています。こんなことが普通にできているのは「命」という支えがあるからこそできていることだと私は思います。自分の体を作ってくれるすべての食という命。私に楽しい時間をくれる友達という命。私をここまで育てて、愛してくれるという命。私たちはさまざまな命に支えられて。今を生きていると思います。動物の死から私の生き方や考え方につながることは今田さんの言葉のお陰です。あの時、イノシシの死と対面しなかったら、今生きていられる幸せには気づかなかっただしょう。命は決して軽いものではありません。お金で買えるようなものでもないし、ゲームのように何度も生き返ることもできません。とても重く、大切なものです。

「死」というものは避けては通れない道です。しかしその前に私たちは生きなければなりません。いただいた命のためにも、生きなければなりません。だからこそ「死ね」「死にたい」そんな言葉を口にしてはいけないと思うのです。生きることがどんなに幸せかを皆さんにも考えてほしいと思います。

私はこれから、たくさんの命に対して、真正面に向き合って生きていきます。この世にたった一つしかない私の命だから。



優 秀 賞

本が教えてくれたこと

飯南町立赤来中学校
2年 堀越 実里

「友達」の意味を辞書で調べてみると「友、心を許している人」と出てきます。私は以前友達と思える人はいませんでした。

小学校4年生の頃、私は周りの人と距離を置いていました。周りの人からの視線が自分にとって刺さるようで怖く、いつも一人で閉じこもったように生活を送っていました。このことを家族に話す勇気もなく、気軽に相談できる友達もいなくて毎日恐怖と孤独に耐え、学校へ通っていました。

そんな中、私の唯一の支えとなっていたのが「本」でした。幼い頃から本が好きだった私は、家に帰るといつも本やマンガを開いて読んでいました。本を読むと、本の中に自分が吸い込まれて自分が自分じゃなくなるような感覚がとても不思議で、好きだったのです。そのため、学校でもほとんど一人で本を読んでいた。

ある日、私はある1冊の本を読みました。その本は、友達についての本でした。友達の存在はとても大切だとか、友達は自分のことを分かってくれているなど書いてありました。私は「ふざけるな。」と思いました。私は今まで「友達ってなんだろう、心を許せる人ってなんだろう。」とたくさん考えてみて、それでも答えは出ないまま苦しみ続けているのにこんな薄い本1冊で何が分かる、本まで自分を敵にするのかと、強い怒りを覚えました。

私はその日、生まれて初めて本を嫌いになりました。

学校でも家でも本を読むことは少なくなり、私は学校という窮屈な空間から逃げ出さなくなっていました。唯一の支えだった本も今の私にはない、自分が自分として輝ける場所はもうどこにもないと考えていました。

そんな中、学校の授業でどうしても本を読まなければならない日があり、そのテーマが「友情」でした。正直、今の気分ではあまり受けたくない授業でしたが、休むこともで

きず、仕方なく授業を受けました。私が読んだ本には、「あなたに友達がいなくとも、あなたの心には花があります。その花を枯らさないようにあなたの心の扉を開けて、光を当てればあなたにもきっと良いことがあるはずです。」と書かれており、私は驚愕しました。今まで読んだ本の中で一番心にしみたからです。こんなに簡単なことだったんだと思う一方で、あの時たった1冊の本で怒った自分をととてもみじめに思いました。その瞬間、私は泣きそうになりました。

そうしていると周りの人が私に「大丈夫?」とか「どうしたの?」などと声をかけてくれて「ああ、私は一人じゃないんだ。自分を支えてくれる人がこんなにたくさんいるんだ。」と感じました。この時、私にも「この人は私の友達です。」と胸を張って言える存在がいることに気づきました。

その日から、友達に悩みを相談したり、本音でぶつかったりできるようになりました。家でも学校の友達の話題を出すことが多くなりました。今では、クラスのみなどと楽しくおしゃべりする時間が私を笑顔にしてくれます。

また、私は吹奏楽部に入っていてクラリネットを吹いています。クラリネットは指使いが難しいです。だからこそやりがいがあります。もっともっと練習して技術を高めたいです。そして、友達や後輩たちといい演奏をしたいです。聴いている人の心に届くような演奏がしたいです。

私は今、このときを輝いています。もう、以前の私ではありません。心の花は枯らさない。笑顔という光を手に入れたのです。

本、それは私を変えてくれた、私を笑顔にしてくれた大切な宝物です。今でも本は、私にとっての支えです。本は私に教えてくれました。心の扉を開けるのは私自身なのだ。これからもずっと本と友達でいたいです。



優 秀 賞

伝えたいこと

出雲北陵中学校
3年 野一色乃愛

皆さんは苦手なことがありますか。私にとって聞くことが苦手です。

「耳さえよかったら。」

時々、私はそう思うことがあります。

私は、中度の感音性難聴です。まったく聞こえないわけではありませんが、日常生活に支障が出てしまうので補聴器を使っています。

難聴だとわかったのは、小学生の時です。その頃はまったく気にしないで、友達と同じように過ごしていました。しかし、学年があがっていくにつれ、友達と会話をしていて、何を言っているのかわからなかったり、授業中に先生の話が聞こえなくて不安に思っていました。私が友達に呼ばれても聞こえなくて、無視をしたと勘違いされ、けんかになったこともありました。

「耳さえよかったら、友達とけんかをするのもなかったのかもしれない。」と私は思いながら、小学校六年生の頃、一度だけ思いっきり泣いたことがありました。その時、母が、「泣いていても何も変わらない。耳が悪いからって笑う人はいないし、それを理由になにもかもあきらめる乃愛も許さない。」

と私を強く抱きしめてくれました。私は、このことを母に言われるまで、大好きだったエレクトーンを辞めようとしていました。リズムが聞こえず発表会でミスをしたり、高い音が聞こえにくくて、このまま続けていくことが嫌になったからです。発表会でミスをしたときは、演奏を聞いていた人に笑われていないか不安でした。ですが、障がいがあるかなんか、人が一生懸命やっていることをバカにしたように笑う人はいません。私は少し苦労しながらではありますが、今でもエレクトーンを続けています。健常者の倍の練習時間が必要ですが、楽しいし、障がいがあるからって何もできないわけではないということを知ってほしいので少し大変でも全然平気です。

健常者は「障がい」に対して、できることが限られているのではないかと思っている人もいるかもしれませんが。しかし、どこかで「障がい」は「個性」だと聞いたことがあります。健常者にできることが少しだけできないだけで、健常者と障がい者に違いがないと思っています。私は耳の聞こえを補う補聴器を使い、テレビを見るときは字幕をつけます。そうす

るとあまり不便は感じません。人は誰にでも苦手なことがあると思います。その時は、補助してくれる物をつかったり、人に助けってもらったりします。それは、健常者でも障がい者でも同じです。だから、障がいは「害」ではなく「苦手なこと」ととらえると障がいに対するイメージが変わると思います。

世間には聴覚だけでなく、他の障がいを持っている人もいます。それを全て理解することは、とても大変で難しいことです。見たり、話したりしただけで障がいを持っている人だとわかることもあります。そのときは、相手の立場に立って接することが大切だと思います。どのように接するのいいのか考えることが障がいを理解するその第一歩です。

身体に障がいを持っている人は場合によっては、「身体障がい者手帳」というものを持っています。バスや遊園地、映画など料金が割引されます。有り難いことですが、障がいによる日々の苦労は、その一瞬だけでは計り知れません。また、確かに障がいの程度があまりひどくない人でも適用される割引もありますが、全てがそうだというわけではありません。人を見ただけで判断しないことが大切です。

私には夢があります。将来は、自分の持っているものを生かすことのできる仕事をしたと思っています。同じような悩みを持っている人の役に立ちたいです。簡単なことではないけれど、自分と向き合い、たくさん考え努力したいです。

私の理想の社会は、健常者と障がい者に同じように接してもらう社会です。人間は、みんな違って当たり前です。できることとできないことがあるから、お互いに助け合っているのだと思います。私は、難聴でも頑張ることができる自分が好きです。やりたいことに一生懸命取り組むことができるからです。でも今、こんな風に思えるのも、これまで周囲の人の思いやりや支えがあったからです。また、もし難聴にならなければ、今のようになんか一生懸命努力することはなかったと思います。これからは、自分でやろうと決めたことは、途中であきらめたりしないでやりとおしたいです。そして、支えてくれる人たちへの感謝の気持ちをしっかり持って、できることを増やしていきたいです。



優 秀 賞

十人十色

大田市立大田西中学校
3年 山本 彩花

あなたは、どの命を優先しますか。

私の家族は、ある2匹の生き物の命について深く考える3日間を過ごしました。この出来事で私は人の意見はこんなにも一人一人違うのだと改めて実感しました。時と場合や自分の立場などで考え方や物事のとらえ方は変化します。まずはその3日間の物語についてどう思うか考えながら聞いてください。

1日目、母が仕事から帰ってくると花だんにヘビがいました。母は今年もヘビが家族に会いに来てくれたことを喜んでいました。このヘビは私の家が建ってから12年間ずっと住み着いていて、毎年家族の誰かと遭遇します。その日は家族に会いに来てくれたヘビの話で盛り上がりました。

2日目、母が夜勤から帰ってくると中庭に巣をつくったツバメが騒いでいたそうです。母が巣を確認しに行くと、ヘビがツバメの巣をねらって接近していました。母は、あわてて木の棒でヘビをおいはらったそうです。私はこの話を聞いて、今までツバメの巣を襲うことなんてしなかったヘビなのにと、なんだか悲しくなりました。

3日目の早朝、いつもと違うツバメの鳴き声に気づいた母は、急いで巣を確認しに行きました。私がおそろおそろ「どうしたん?」と聞くと母は悲しそうに「ツバメの巣がやられちゃった。」と言いました。私がパッと巣の方を見ると、巣の中でとぐろを巻いて舌をチロチロと出しているヘビの姿がありました。「卵が食べられてしまった。」と、私は言葉を失い呆然としてしまいました。父は必死にヘビを巣から追い出し、ネズミ用の粘着シートの上に落しました。そして、動けなくなったヘビを河原に持って行きました。私は頭と心の整理がつかみませんでした。しばらくすると、父が戻ってきたので私はすかさず「ヘビ、結局どうしたの?」と聞くと父は、「粘着シートごと、河原に置いてきた。多分死ぬと思う。」

と言いました。(え、ヘビ死ぬの?毎年あいさつに来ていたヘビがいなくなるの?)と思うと急に心に穴があいてしまったような気持

ちになりました。そして、「殺さなくても良かったじゃん!」と感情的に言ってしまいました。すると母が「もしツバメの子が、私の子供だとして、ヘビが殺人鬼だとするよ。家の中で自分の子供が殺人鬼におそわれていたら絶対に戦うし、許さないよ。」と言いました。私もヘビのお腹がふくらんでいるのを見て、ヘビに絶望しましたが、殺さなくても良かったのではないかと思いました。1日目には会いに来て喜ばれていたヘビが、3日目には憎まれることとなり、家族みんなで重い気分になりました。以上が、みなさんに聞いてもらいたかった出来事です。

ヘビに対する行動や判断について、私は、毎年あいさつに来ていた愛着のあるヘビだったので殺すべきではなかったと考えています。もし、ヘビに家族がいるとしたら、ヘビの家族は、ヘビの死を悲しむはずです。そして、私の両親は、被害にあったツバメの家族の気持ちになり、自分の子供が殺されたら、すごく悲しいし、許せないと言っていたのだと思います。

皆さんはどう思いますか。ヘビの立場、ツバメの立場、人間の立場、それぞれ感じ方やとらえ方が違って、どの言い分も正しいし、正解はできません。今回の出来事を通して家族で思いを伝え合うことができました。皆さんも自分と違う意見や考えを持った人と話をするとき、相手の意見を聞き入れることで、見えなかったものが見えてきたり、違った考えに気づかされたりすると思います。

この世の中は、十人十色です。家族でさえ、こんなに意見が違うのだから学校の中で自分と違う意見に出会うことは当たり前だと思います。私はこれから生活の中で、様々な人や生き物の立場に自分を置き換えながら、生活していこうと思います。皆さんも違う意見を持った人を遠ざけず、話し合うことから始めてみてください。

最後に、この3日間の物語について、あなたに周りの人達と話し合ってもらえたらうれしいです。そして、どう思ったか声をかけてください。私はあなたの意見を聞きたいです。



優 秀 賞

私の夢

隠岐の島町立五箇中学校
3年 澤尾 美寧

あなたの夢は何ですか。

私の夢は、女子プロ野球選手になることです。今年の冬に参加した立志式でも、この夢を発表しました。その時、笑い声が聞こえました。けれど私は、この夢を口にすればする程決意がかたくなっていきます。

私がこの夢を持ったのは、小学校6年生の時、キャプテンで優勝した時の喜びが、今でも忘れられないほど、大きかったからです。そして私は中学生になり、女子一人で野球部に入部しました。中学生になると、小学生の頃と違って、男子との筋力の差など、不安なこともたくさんありました。自分なりに攻撃の仕方を考え、それができるように努力しました。また、女子一人で、心細いこともありました。本土の遠征などへ行くと、必ず部屋は一人で、さみしく思うこともありました。でも、この不安や悩み以上に、野球を続けたい、野球が好きだという気持ちが、私の中でますます膨らんでいったのです。こんなにも、野球に打ち込めたのは、私を受け入れてくれた先輩や仲間がいたからだと思っています。みんなの、野球に取り組む姿に、何度も心を動かされました。苦しい時、一緒に乗り越えた仲間の存在は、いつも私の心の支えでした。そして7年間も教えてもらっている、コーチの存在は、とても大きいものです。私のことを特別扱いせず、いつも男子と同じように鍛えてくれ、野球の魅力を教えてくれました。

こうして、中学校最後の大会、隠岐大会にピッチャーとして臨みました。「絶対優勝する」という目標を胸に戦いました。しかし結果は0対6と大差で負けてしまいました。こんなに悔しかったのは、初めてです。涙が止まりませんでした。このまま野球を終わらせてしまうのは、絶対にいやだと強くそう思いました。

「高校に行って硬式野球がしたい」と私は決心しました。だけれど、県内には女子が硬

式野球をできる学校がありません。でも3年前に、隠岐から京都の女子硬式野球部のある高校へ行き、今でも厳しい練習に耐え、そこで頑張っている先輩がいます。私はその人のことをとても尊敬しています。その人の後を追いかけて、私もチャレンジしてみようと思っています。

そのために私は、今まで以上に勉強と、家庭生活にも力を入れているつもりです。野球だけできても人としての優しさと強さが身についていなければ、どこへ行っても通用しないことはコーチから学んだことです。高校に入って勉強と部活の両立ができるよう家庭学習の習慣づけに必死です。また、寮生活になることを覚悟して、自分でできる洗たくや炊事の手伝いなどを意識してやっています。この努力を残し半年続けて、大好きな野球を選んだ自分自身を信じて、チャレンジしてみます。きっと「野球ができる喜びとその環境を作ってくださった、周りのたくさんの人たちへの感謝の思い」を持ち続ければ乗り越えることができると自分にかけていたのです。そして高校で3年間、野球を思いっきり楽しんでプロテストを受け、必ずプロ野球選手になってみせると心に誓っています。

もう一つ、私には夢があります。いつか、隠岐でスポーツをがんばる少年少女に開かれた未来を与えられる野球選手になることです。離島の田舎で育ち、島で身につけた野球が、全国で通用するかどうか試してみたいし、島での野球が劣っていないことを証明したいのです。私は大好きな隠岐に、夢と希望を与え、いつか自分もコーチのように、島の子どもたちに、熱く野球の魅力を語り、教えてあげられる人になります。そのために、前を向いて歩いていきます。



優 秀 賞

母への理解

益田市立中西中学校
3年 永尾 心風

私は母が嫌いでした。看護師の仕事をしている母のことが…

幼い私はいつも疑問に思っていました。

なぜ夜中に仕事に行くの？私より仕事が大
事だから？娘を置いてまで仕事に行く必要な
んてあるの？

私がまだ3歳だった頃、母は夜勤のある3
交代勤務をしていました。私は、母が夜中に
仕事に出かけていくのがとても嫌でした。あ
る夜勤の日、私は母のかばんを抱えて眠り、
母を仕事へ行かせないようにと小さな抵抗を
したことがありました。しかし、気がつく
と母は隣に寝ていませんでした。明かりのも
れる隣の部屋へ行ってみました。そこでは母
が化粧をし、仕事へ行く準備をしていまし
た。私は母に、

「仕事になんて行かないで一緒に寝ようよ。」
と言いました。しかし、私の言葉にはっきり
とした返事はありませんでした。しばらくし
て母は、
「母さんは車で家の周りをぐるりと1周して
くるから布団をかぶって温かくして待って
いてね。」

とにっこり微笑んで言いました。母の言葉
通り待っているうちに、だんだん眠たくな
り、私は布団にくるまり朝まで玄関で寝て
いました。

母の優しい嘘に救われた夜もありました
が、やはり母が居ない夜は寂しく、辛いも
のでした。

しかし、母は夜中に仕事に出かけるにも
関わらず辛そうな表情ではありませんでした。
むしろいきいきとしているように私には見
えました。

母はなぜそんなに楽しそうに仕事に行く
のだろう。

娘を置いてまで行かなければならない看護
師という仕事とは一体どんなものなのだろ
う。

この思いは、中学3年生になったつい最近
までずっと私の心の中にありました。

この疑問が解けるきっかけになったのは、
職場体験でした。

私は母が勤務していた益田赤十字病院で2
日間看護体験をしました。母を通して「看護
師」という職業に良い印象がない私は、「看護
を体験したい！」という前向きな気持ちか
らというより、「生まれ変わっても看護師に
なりたい。」と話す母の仕事とは一体どのよ
うなものなのか知りたいという気持ちから選
んだ職場でした。

入院病棟での足浴中にある患者さんがこん
な話をしてくれました。

「私は6ヶ月間も寝たきりで毎日つらかつ
たんよ。でもね、看護師さんに言葉をかけて
もらったり、話を聞いてもらったりして、ずい
ぶん助かるとるんよ。」

私はこの言葉を聞いて、看護師の仕事は患
者さんのお世話をするだけでなく、話を聞い
てあげることも、大切な仕事の一つなのだ
と知りました。それから私は患者さんの話に
しっかりと耳を傾け、意識して声を掛けるよ
うにしました。するとある患者さんが、
「ありがとう。気持ちが明るくなって何だか
元気になった気がする。」と言ってくださ
いました。

私はその言葉を聞いて嬉しくなり、こうし
た患者さんとの日々の関わりに、母はやりが
いや生きがいを感じているのではないかと思
いました。

そして職場体験を通して、看護師という仕
事がかっこよく見えるようになりました。私
たちを養うために夜中でも働いてくれていた
母に、今なら素直に「ありがとう。」と伝え
られる気がします。幼くて母の仕事を理解
できなかった私ですが、実際に看護師の体験
をしたことによって母の仕事に対する見方が
変わりました。

看護師という仕事は人の心も体も元気にす
る、人から感謝される、本当に素晴らしい仕
事だと思えるようになりました。そして、そ
んな看護師の仕事に誇りを持ち、毎日笑顔
で仕事をしている母のことを尊敬します。私
も人から感謝され、私自身がやりがいと誇
りを持つような仕事につき、母のように働
きたいです。



優 秀 賞

チャレンジャー

雲南市立大東中学校
1年 永井 宏樹

「初めてのことにゃあ、興味を持たないけんで。」

やったことがないから二の足を踏みそうなとき、自信がなくてどうしようと思ったとき、ぼくはこの言葉を思い出します。そして、いつも「チャレンジャーでありたい」と思うのです。

中学校に入学して、初めて体験することが多くありました。でも、ぼくは初めてのことを自分が成長できるチャンスだと考えて、一つ一つ壁に立ち向かうことを決めています。サッカー部に入部し、技術がぼくたちの何倍もある先輩とトレーニングをします。やっぱり初めてのころは、ボールを取りに行くのにも勇気が必要です。自分が取りに行っても簡単に抜かれて失点してしまうかもしれない。チームに迷惑をかけたらどうしようと、自信が持てず、動くこともできないぼくは、入部してから少しの期間、ただの置物のようでした。そのとき、ぼくは小学生のときのことを思い出しました。

それは夏休みの科学教室に行ったときのことです。出雲科学館から科学の先生がいらっしゃって、ぼくたちの前で液体窒素やヘリウムガスなどを使った実験をたくさんしてくださいました。そのうちの一つの実験で、ぼくは大切なことを学びました。それは、ゴム風船に水素ガスを入れてふくらませ、火を近づけるという実験でした。先生が風船に火を近づけると、そこにいた、子供から大人までほとんどの人が耳をふさいだり、目を閉じたり、体を後ろへ倒しのけぞったりして怖がりました。ぼくも耳をふさぐ準備をして構えていました。すると先生は、「こりゃ。初めてのことに、そげに怖がったたら、お前ら何もできんくなあで。初めてのことにゃあ、興味を持たないけんで。」確かにそのとおりでぼくは思いました。案外、予想外のことが起こるかもと風船に目を戻しました。火が風船にふれようとしたとき、「パン！」という音の後、「ポッ！」と中にあった水素ガスが一瞬燃えました。目を閉じてい

た人や耳をふさいでいた人は、燃えている瞬間や燃えた音を見たり聞いたりできなかつたと思います。ぼくが、風船に注目したことで、二つものことを得られたのです。

この経験を思い出し、先輩がドリブルしているボールを見つめながら、あのボールを取りに行ったら何かが得られるかもしれないと考え、勇気をふりしぼって取りに行きました。一度、自分の足にボールが当たったものの、再び先輩がボールを取り、ぼくの後ろに走っていきました。「うわー！ やっちまった！」と下を向きかけました。すると、顧問の先生が、このぼくのプレーに対して、技術的なアドバイスをしてくださいました。ぼくが、一つチャレンジしたことで、次の課題が見えてきました。部活動でのチャレンジとは、自信をつける、勇気を持つこと、プレーをすることで必ず改善点が見つかり、再びそれに挑戦すること。これを続ければ、チャレンジが技術として自分の身に返ってくるのです。

このように、勇気があること、努力が必要なことは、毎日のようにやってきます。これは自分が変わるチャンスなのです。そんなときに自信を持って、立ち向かう。それこそが「チャレンジャー」なのだとはぼくは思います。初めてのことに興味を持つことを大切に生活すると、その分得られるものが多くあるとぼくは信じています。チャレンジャーであることは、子供から大人までの全ての人に言えることです。ぼくは、まだ1年生なので、初めて経験することが数えきれないほどあります。日々、チャレンジャーであることを意識して、リーダーへの立候補や積極的な発言など人より多くしようと努力しています。チャレンジャーであることで、自分の意見を主張できる人になれると思います。チャレンジャーであることで、これからの学校生活や家庭の暮らしで役立つことも得られると思います。

新しいことを探すため、自分を強くするために、ぼくはチャレンジャーであり続けます。

平成28年度 少年の主張島根県大会開催要項

(第45回 島根県少年弁論大会)

- 趣 旨** 中学生自らが社会の一員であることを自覚し、責任感に目覚め、健やかに成長することが求められている。この「少年の主張島根県大会」は、明日を担う中学生が日常生活を通じ、日頃考えたり感じたりしたことを広く発表することにより、中学生の自立心を育てる機会とするとともに、視聴する親や大人の青少年健全育成に対する深い理解・関心、協力を求めようとするものである。
- 主 催** 青少年育成島根県民会議 島根県中学校長会 雲南市中学校長会
独立行政法人 国立青少年教育振興機構
- 共 催** 雲南市教育委員会
- 後 援** 島根県 島根県教育委員会 島根県警察本部 雲南市
雲南市青少年健全育成協議会 島根県PTA連合会 雲南市PTA連合会
- 開催日時** 平成28年9月27日（火） 10：30～15：30
- 開催場所** 雲南市木次経済文化会館 チェリヴァホール
〒699-1311 雲南市木次町里方55番地（電話：0854-42-1155）
- 発表者** 中学校に在学する者（国籍は問わないが、日本語で発表する者）で、市郡中学校長会長より推薦された者。（市郡別の定員は別表のとおり）ただし、県大会開催市郡に限り定員より1名追加して推薦することができる。（発表順は別途事務局にて抽選）
- 実施方法**
 - 発表時間 5分程度（6分以内を厳守）とする。（400字詰原稿用紙4枚程度）
 - 発表内容 ①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
②家庭、学校生活、社会（地域活動）及び、身の回りや友達との関わりなど。
③テレビや新聞などで報道されている社会のさまざまな出来事に対する意見や感想、提言など。
以上、3つの中のいずれかに該当し、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを、中学生らしい自由にユニークな発想で、飾り気のない言葉でまとめたもの。また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにする。
- 審査員** 別に定める。
- 表 彰** 審査の結果、次の区分により発表者全員に賞状及び賞品を授与する。
島根県知事賞 1名（県代表） 島根県教育委員会教育長賞 1名
島根県警察本部長賞 1名 青少年育成島根県民会議会長賞 1名
審査員特別賞 2名 優秀賞 11名
- 発表者の交通費等** 発表者の交通費及び昼食は主催者が負担する。
- 発表者名簿等の提出**

各市郡中学校長会長は、発表者名簿を9月12日（月）までに青少年育成島根県民会議事務局まで提出すること。（期限厳守、FAXでもよい。）

▼青少年育成島根県民会議 〒690-8501 松江市殿町1 県庁青少年家庭課内
TEL：0852-22-6524 FAX：0852-22-6045
- その他** 県代表者の発表は中四国ブロック枠で発表原稿、録音したカセットテープ又は電子媒体で審査され、各ブロック代表者（2名）は、「第38回少年の主張全国大会～わたしの主張2016～」[主催：(独)国立青少年教育振興機構 平成28年11月13日（日）於：東京]に出場する。

審 査 員

| | | |
|-------|------------------|---------|
| 審査員長 | 島根県子ども会連合会会長 | 磯田 謙一 様 |
| 審 査 員 | 山陰中央新報社特別論説委員 | 前田 幸二 様 |
| 審 査 員 | 島根県警察本部少年女性対策課主査 | 三浦 洋子 様 |
| 審 査 員 | 出雲教育事務所指導主事 | 日野 久美 様 |
| 審 査 員 | 雲南市小学校長会長 | 田中 晴久 様 |
| 審 査 員 | 雲南市P T A連合会母親委員長 | 谷戸 京子 様 |
| 審 査 員 | 雲南市青少年健全育成協議会副会長 | 太田多美子 様 |

来 賓

| | |
|-----------------|---------|
| 島根県教育委員会教育長職務代理 | 岡部 康幸 様 |
| 島根県教育委員会委員 | 藤田 千鶴 様 |
| 島根県警察本部生活安全部長 | 榊原 優二 様 |
| 出雲教育事務所長 | 糸賀 和雄 様 |
| 出雲児童相談所長 | 山崎 俊行 様 |
| 島根県教育研究会会長 | 北尾 浩之 様 |
| 島根県P T A連合会会長 | 佐々木 功 様 |
| 雲南市長 | 速水 雄一 様 |
| 雲南市議会議長 | 藤原 信宏 様 |
| 雲南市教育委員会教育長 | 土江 博昭 様 |
| 雲南警察署長 | 廣瀬 勉 様 |
| 雲南市教育研究会会長 | 若槻 徹 様 |
| 雲南市P T A連合会会長 | 影山 佳貴 様 |

平成28年度「少年の主張島根県大会」 市郡大会概要一覧

| 市郡名 | 学校数 | 出場枠 | 開催日時 | 開催場所 |
|-----|-----|-----|----------|----------------------|
| 松江 | 19 | 2 | 9月9日(金) | (橋北地区) 第一中学校 |
| | | | 9月9日(金) | (橋南地区) 第三中学校 |
| 安来 | 5 | 1 | 8月26日(金) | 第一中学校 |
| 出雲 | 15 | 2 | 9月16日(金) | ビデオ審査 ※台風による中止のため |
| 雲南 | 7 | 2 | 8月30日(火) | 加茂中学校 |
| 飯石 | 2 | 1 | 8月30日(火) | 赤来中学校 |
| 仁多 | 2 | 1 | 8月31日(水) | 横田中学校 |
| 大田 | 6 | 1 | 9月7日(水) | 北三瓶中学校 |
| 浜田 | 9 | 1 | 9月8日(木) | ふれあいジムかなぎ |
| 江津 | 4 | 1 | 9月7日(水) | 江東中学校 |
| 邑智 | 6 | 1 | 9月2日(金) | 川本中学校 |
| 益田 | 12 | 2 | 9月5日(月) | グラントワ |
| 鹿足 | 6 | 1 | 9月6日(火) | 吉賀中学校 |
| 隠岐 | 7 | 1 | 9月9日(金) | 西ノ島水産総合ターミナルビル |

*開催地 雲南市については1名追加

アトラクション紹介

～雲南市立木次中学校 吹奏楽部～

こんにちは、雲南市立木次中学校吹奏楽部です。

今年の吹奏楽コンクール島根県大会では26名で中学校Bの部に参加し、昨年に続いて金賞を受賞しました。また、去る8月21日にはここチェリヴァホールで第32回定期演奏会を開きました。

生徒数の減少に伴い、部員の人数も年々減ってきましたが、現在36名で日々練習に励んでいます。春、秋の地域行事、JR木次線のトロッコ列車オロチ号出発式、施設訪問など、地域に出かけて演奏する機会も多く、地域に密着したスクールバンドとして親しまれています。

今日は2・3年生23名による演奏をお届けします。定期演奏会に続いてこのチェリヴァホールで演奏する機会を与您にいただいたことに、心から感謝申し上げます。なお、ゲストとしてソプラノの目宅麻記子さんをお招きしております。心を込めて演奏しますので、どうか最後までごゆっくりお楽しみください。

- ☆ AMAZING GRACE 賛美歌
- ☆ 赤いスイートピー 呉田軽穂 作曲
- ☆ 銀河鉄道999 タケカワユキヒデ 作曲
- ☆ ロンドンデリーの歌 (ダニー・ボーイ) アイルランド民謡
- ☆ 雲南市の歌 菅田 茂 作曲 / 山本英史 編曲

平成27年度(昨年度)の受賞者

◆島根県知事賞

一番大切なもの

隠岐の島町立西郷南中学校1年 山下 夏希

◆島根県教育委員会教育長賞

分かり合うとは

飯南町立赤来中学校2年 大坂 瑠美

◆島根県警察本部長賞

未来を担う私の一票

松江市立第二中学校3年 宮廻 那智

◆青少年育成島根県民会議会長賞

支えられて、夢に向かって

出雲市立平田中学校2年 松浦 鈴香

◆審査員特別賞 (2作品)

花に教えられたこと

川本町立川本中学校2年 上坂 優菜

十二月二日十二時四十三分

江津市立江津中学校3年 和原絵梨奈

平成28年度 少年の主張全国大会 出場者・審査結果

期日／平成28年11月13日（日） 13時～16時

会場／国立オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟大ホール

| | ブロック | 評価結果 | 県名 | テーマ | 氏名 | 学校名 |
|----|---------|-----------------|------|-------------------|----------------------|---------------------------------------|
| 1 | 九州 | | 長崎県 | 社会の架け橋に | おおく ぼ ゆめ な 大久保夢菜 | いさはやしりついいもりちゅうがっこう 諫早市立飯盛中学校 |
| 2 | | | 熊本県 | 縁（えにし） | きたぞの ま ゆみ 北園 真弓 | う き しりつしらぬ ひ ちゅうがっこう 宇城市立不知火中学校 |
| 3 | 北海道・東北 | | 山形県 | 「伝える」ことで、つながる心 | あお の みず き 青野 瑞希 | なんよう しりつおきどうちゅうがっこう 南陽市立沖郷中学校 |
| 4 | | | 福島県 | インド人～喜捨のころ～ | さかきばら みつ き 榊原 光起 | あいづ ばん げ ちゅうがっこう 会津坂下町立坂下中学校 |
| 5 | 関東・甲信越静 | | 栃木県 | 「いいね！」は、本当にいいのか | たか せ いつき 高瀬 樹 | さくら しりつ きつれがわちゅうがっこう さくら市立喜連川中学校 |
| 6 | | 審査委員長賞 | 新潟県 | みんなが幸福な社会を | たかはし しん たろう 高橋心太郎 | ご せん しりつ ご せんきたちゅうがっこう 五泉市立五泉北中学校 |
| 7 | | | 神奈川県 | 新たな扉の向こうに | はやし り き 林 陸樹 | よこはま しりつかみなが や ちゅうがっこう 横浜市立上永谷中学校 |
| 8 | 中部・近畿 | 内閣総理大臣賞 | 岐阜県 | 障がいは個性 | おお み か りん 大見 夏鈴 | せき しりつあひ が おかちゅうがっこう 関市立旭ヶ丘中学校 |
| 9 | | | 富山県 | 「誰や、こんなとこに捨てたやつ。」 | なか だ りゅうた 中田 龍太 | い みず しりつだいもんちゅうがっこう 射水市立大門中学校 |
| 10 | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 三重県 | 伝えたいこと | なかまえ じゅんな 中前 純奈 | よつ か いち しりつ は づ ちゅうがっこう 四日市市立羽津中学校 |
| 11 | 中国・四国 | | 島根県 | つなぐ傘 | はやし え り 林 英里 | まつ え しりつだいいいちちゅうがっこう 松江市立第一中学校 |
| 12 | | 文部科学大臣賞 | 広島県 | 戦争を知ること | お た ゆういちろう 牟田悠一郎 | ひろしま しりつふた ば ちゅうがっこう 広島市立二葉中学校 |

あしがき

平成28年度「少年の主張島根県大会」の報告書をお届けします。本年度の県大会は、雲南市木次経済文化会館チェリヴァホールを会場にして行われ、県内13市郡から選抜された17名の皆さんが出場しました。

今回の発表では、導入の部分で言葉の問題を取り上げているものが何点か見受けられました。学校現場では、やはり言葉の問題は大きいということを考えさせられました。

また、家族のことを題材にした発表が多かったです。中学生にとっては、友達も大事だけれど、身近な家族が大切な存在であると改めて感じました。

発表者の3分の2は3年生であり、将来の夢、希望、就職についての発表がありました。医者になる、プロ野球選手になるなど、きちんと将来を見据えて発表されているのを聞いてとても頼もしく感じましたし、将来に向かって努力して、夢をかなえてほしいと思いました。

また、「チャレンジャー」という言葉を使った発表がありましたが、今の日本にとって「チャレンジ」という言葉は大事なキーワードだと思います。彼のように「チャレンジ」の気持ちを持って努力すれば、もっと良い日本になるのではないかと思います。

17名の皆さんはとても落ち着いてはつきりと発表され、滑舌も態度も、聴衆に訴えかける目線の配り方も、きちんとできていました。審査員からはとても素晴らしかったという評価がありました。

この報告書には、県大会で発表された17作品と全国大会での最優秀作品を掲載しています。この報告書が多くの皆さんに読まれ、発表者の思いが一人でも多くの皆さんに伝わり、各地域で活かされることを願っています。

平成28年12月
平成28年度「少年の主張島根県大会」
審査員長 磯田 謙一

平成28年度 少年の主張島根県大会報告書

平成28年12月発行

編集 青少年育成島根県民会議

〒690-8501 島根県松江市殿町1番地（県庁青少年家庭課内）

TEL 0852-22-6255 FAX 0852-22-6045

<http://www.shimane-youth.gr.jp/>

E-mail : nobinobi@shimane-youth.gr.jp

Facebook 「青少年育成島根県民会議」



青少年育成島根県民会議キャラクター
ハピネス